「霊夢」

雅歌書第５章～７章

武蔵野日曜聖書講筵　１９７６年４月４日

小池辰雄

# 【見出し１】

【雅歌５】

1 わがわがはなよめよ 我はわが園にいり わがととをり わがと蜜とをい わが酒とわが乳とを飲めり わがよ 請う食え わが愛する人々よ 請う飲みあけよ

2われはりたれどもわが心はいたり 時にわが愛する者の声あり 即ちをたたきていう わが妹 わが わが わがきものよ われのために開け わがには露満ち わが髮の毛には夜のみてりと 3われすでにわがをげり いかでまた着るべき にわが足をあらえり いかでまたすべき 4わが愛する者戸の穴より手をさしいれしかば わが心かれのためにうごきたり 5やがて起きいでて わが愛する者の為に開かんとせしとき 沒薬わが手より沒薬の汁わが指よりながれてののうえにしたたれり 6我わが愛する者の為に開きしに わが愛する者は已に退き去りぬ さきにその物いいし時はわが心さわぎたり 我かれをたずねたれどもわず 呼びたれどもなかりき 7をまわりありくわれを見てうちて傷つけ 石垣をまもる者らはわがをはぎとれり 8エルサレムのよ 我なんじらにかたく請う もしわが愛する者にあわば 汝ら何とこれにつぐべきや 我愛によりてみわずらうと告げよ

9なんじの愛する者は別の人の愛する者に何のれるところありや ののいとわしき者よ なんじが愛する者は別の人の愛する者に何の勝れるところありて われらに固くうや

10 わが愛する者は白くかつにして 万人の上に越ゆ 11 そのは純金のごとく その髮はふさやかにして黒きことのごとし 12 その目は谷川の水のほとりにおる鴿のごとく 乳にて洗われて美わしくれり 13 そのはしき花の床のごとく 香草の壇のごとし その唇はのごとくにして沒薬の汁をしたたらす 14 その手はきばみたるをしののごとく 其は青玉をもておおいたる象牙ののごとし 15 そのはの柱を黄金の台にてたてたるがごとく そのはレバノンのごとく そのれたるさまは香柏のごとし 16 その口ははなはだ甘く 誠に彼には一つだにうつくしからぬ所なし エルサレムの女子等よ これぞわが愛する者これぞわがなる

【雅歌６】

1 のいとわしきものよ 汝の愛する者はへゆきしや なんじの愛する者はいずこへおもむきしや われら汝とともにたずねん

2わが愛するものは己の園にくだり しき花の床にゆき 園の中にて群をい また百合花を採る 3我はわが愛する者につき わが愛する者はわれにつく 彼は百合花の中にてその群を牧う

4わがよ なんじは美わしきことテルザのごとく やかなることエルサレムのごとく 畏るべきこと旗をあげたるのごとし 5なんじの目は我をおそれしむ 請う我よりはなれしめよ なんじの髮はギレアデ山の腰にしたる山羊の群に似たり 6なんじの歯は毛をりたる牝羊のよりたるがごとし おのおのをうみてひとつも子なきものはなし 7なんじの頬はの後にありて のに似たり 8六十人 八十人 数しられぬあり 9わが鴿わがき者はただ一人のみ 彼はその母のにして産みたる者の喜ぶところの者なり は彼を見てなる者ととなえ は彼を見てむ 10 こののごとくに見えわたり 月のごとくに美わしく日のごとくに輝き 畏るべきこと旗をあげたるのごとき者は誰ぞや

11 われの園にくだりゆき 谷の青き草木を見 葡萄や芽ざしし の花や咲きしと見回しおりしに 12 わず知らず 我が心われをしてわが貴き民の車のにあらしむ

13 帰れ帰れ シユラミのよ 帰れ帰れ われら汝を観んことをねがう なんじら何とてマハナイムのを観るごとくにシユラミの婦を観んとねがうや

【雅歌７】

1 君のよ なんじの足はの中にありてに美わしきかな 汝のはまろらかにして玉のごとく の手にて作りたるがごとし 2なんじのはの欠くることあらざるきのごとく なんじの腹は積みかさねたる麦のまわりを百合花もてかこめるが如し 3なんじの乳房は牝鹿の双子なる二の小鹿のごとし 4なんじのはのの如く 汝の目はヘシボンにてバテラビムの門のほとりにある池のごとく なんじの鼻はダマスコにえるレバノンののごとし 5なんじの頭はカルメルのごとく なんじの頭のはのごとし 王その垂れたる髮につながれたり

6ああ愛よ もろもろのの中にありてなんじは如何に美わしく 如何にばしき者なるかな 7なんじの身のはの樹に等しく なんじの乳房は葡萄のふさのごとし 8われう この棕櫚の樹にのぼりその枝に執りつかんと なんじの乳房は葡萄のふさのごとく なんじの鼻のはのごとくわん 9なんじの口はのごとし わが愛する者のためにかに流れくだり れる者の口をして動かしむ

10 われはわが愛する者につき 彼はわれを恋したう 11 わが愛する者よ われら田舍にくだり 村里に宿らん 12 われらにおきて 葡萄や芽ざしし やいでし の花やさきし いざ葡萄園にゆきて見ん かしこにて我わが愛をなんじにあたえん 13 かぐわしきをち もろもろのき古き新らしき共にわが戸の上にあり わが愛する者よ我これをなんじのためにたくわえたり

# ●極限状況からの入信

私は昔、英語の授業を通して、心の或る大事な要素が養われたことを今でも思う。というのは、昔は英語の教科書にテニソン〔Alfred Tennyson 1809～1892 〕とか、ワーズワース〔William Wordsworth 1770～1850 〕とか、ロングフェロー〔Henry Wadsworth Longfellow 1807～ 1882〕とか、そういう詩がだいぶあった。その詩は、私は暗唱するように覚えた。非常に大事でありました。今の教科書は詩がほとんどないらしいね。受験勉強、会話のことばっかりやっている。会話でＬＬなんてのは私は大嫌いだ――大嫌いといっては悪いけれども――そんなことは必要ないだ、本当は。イギリスのスピリッツ〔spirit 精神〕、ドイツ語をやるならドイツのドイッチェシュトルム〔deutsche Sturmドイツ的激情？〕、そういったものを、言葉を通してその文化の精神を伝えるような授業ができなかったら、本当の授業ではない。語学をやったってしょうがないんだ。……

何かかんかでこの集会から去っていく人は――人のことを言う必要はないけれども――

「本当にこの集会を自分が荷おう」

という一人びとりであるならば、そういうことは在り得ないはずです。それはやっぱり、去って行くのは、それはこちらの申し訳ない面もあるでしょう。けれども、やはり決してそれは善くはないんです、そのご当人にとって。「わるかった」と言って、やって来れば、いつでも私は迎える。「かつてこうだった」なんて、絶対にそういうことは言いません。

どこかへ行って、そちらの方でどこかにぶつかって、そして火が出て、

「よし、やはり先生の福音は本ものだ」

ということで、そっちでやってくれれば、それで結構です。私は、いわゆる相対的な判断、時間空間で制限されるようなことはもう突き抜けてしまったんだよな。だからもう、本当に絶対空間、絶対時間に――絶対空間というのは天国的現実ということです――

「自分のあるところに天国がある。運命環境がどうあろうと、そんなことは問題ではない」

というところに是非とも入って下さい。まぁ、人間だから、いろいろ波はありますよ。波があって、グルグル回っている波だよ、そしてある時にガタンと落ちる。そこに岩があって、そいつにぶつかって砕けて、グーッと上昇する。大体、そんなようなのが本当の悔改めということです。

人間というのは、あるひとつの極限状況──それはどういう内的の状況であろうと、外的な状況であろうと──私なんかは、信仰に入るひとつのきっかけは外的状況です。私の父とも頼んでいた政美兄が北京でもって仆れた。細腕でもって五人の子供たちを育ててくれた母は――私は第二巻は母に献げるつもりですが――本当に苦労した。せっかく仕上がった一番上の兄貴がぶっ仆れたから、それで失明してしまった。帰りの紅海の上で。これには参ったね、私は。兄貴は仆れ、母は失明して帰ってきた。家は畳んで叔父さんのやっかいになる。もうこれは外的極限状況の惨憺たること。家財道具は売ってしまって――兄貴の本はかなりとって置いてもらってよかったけれども――それでも、

「ああ、あの本だけは」

というような、『少年日露戦史』という本が私は惜しくてしょうがない。巌谷小波が書いた全２０巻の実に素晴らしい本です。あれは本当に宝だった。私の兄貴は全部「美」をとったので――美良可といって甲乙丙、全甲です――その成績をとった時にご褒美に勝ってもらったという話です。そういう全２０巻の本、これだけは私はとっておきたかったね。それをどうも売ってしまったらしい。……

そういう外的な或いは内的な極限状況にぶつかって、展開する。私は内村鑑三先生の本を開いて、この信仰の世界に入った。だから、『無者キリスト』の扉に書いたように、実は小池政美を一番先に書きたかったんですけれども、自分の兄貴ですから。そういうことなんです。とにかく、どのようなきっかけにしろ、外的な極限状況から入信したけれども、それから先の今度はもう一つの関門があった。それは聖霊のバプテスマです。……

# ●わが妹わが佳耦わが鴿わが完きものよ

今日は雅歌書５章から７章まで、「霊夢」と題した。

1 わがわがはなよめよ

「はなよめ」と言いましても、詳しくいえばのことです。

我はわが園にいり わがととをり わがと

これは葡萄の房の干したものでしょうね。

蜜とをい わが酒とわが乳とを飲めり

これはもちろん牧者、牧人の、シュラミの女の相手の声です。

わがよ 請う食え わが愛する人々よ 請う飲みあけよ

これはエルサレムの女たちの誰かが言ったらしい。それから今度はシュラミの女の言葉になる。２節からずっとそうだな、所々切れているところがあるかもしれない。

2われ〔わが身〕はりたれどもわが心はいたり

ということは、眠りの中で霊的な目覚めでもって幻を見ているわけです。それで「霊夢」と書いたわけです。

時にわが愛する者の声あり 即ちをたたきていう

〔聞け、わが愛する者戸を叩きつつあり〕

まぁ訳し方はいろいろです。「わが愛する者」というのは、牧者が戸を叩いている。

わが妹 わが わが わがきものよ

畳みかけて言ってますね。「鳩」というのは、恋人のことをいう――霊鳥ですけれども――「わが完きもの」という言い方がちょっとおもしろいですね。即ち「わが完きもの」というのは、相手を、ある意味においては、「お前と一緒なら、本当に完くなる」という気持もあるでしょうね、自分を完くしてくれるものということ。

われのために〔戸を〕開け　わが〔頭上〕には露満ち　わが髮の毛には夜のみてりと 3われすでにわが〔下着〕をげり いかでまた着るべき

そういう声を聞いたんだが、自分はもうこういう状態であるからと。もう寝についている事態をいうわけだね、寝ているんだから。寝ていて、その中で夢を見て、こういう現実を言っているわけですよ──何か二重写しみたいな妙なこと──いかでまた着ることができるかと。

にわが足をあらえり いかでまたすべき 4わが愛する者 戸の穴より手をさしいれしかば わが心かれのためにうごきたり

向こうは待ちきれないで開けようとしたというわけだな。それだから急いで出て行って、

5やがて起きいでて わが愛する者の為に開かんとせしとき 沒薬わが手より沒薬の汁わが指よりながれてののうえにしたたれり

と面白いことが書いてある。昔、ヘブライでは自分の愛する人がやって来た時に――本当は、愛する人が相手の所へ行った時に戸を叩きながら、花環をそこに飾ったり、あるいは香料をそこに垂らしたりするということだそうです――それの逆をそこに書いてある。

6我わが愛する者の為に開きしに わが愛する者は已に退き去りぬ

どこかへ行ってしまって影も形も見えない。これはやっぱり夢なんです。

夢の現実で満たされようとした時に目が覚めてしまって、「おやおや」なんていう、そういうことがあるでしょ。嫌な夢を見た時には「ああよかった」ということだし、何か楽しい夢を見た時には「おやおや」ということになる。これはそっちの「おやおや」の方でしょうね。だから、どこかへ見えなくなってしまったというのは、これは夢でなければこういうことはないわけですよ、いわゆるだったら。

復活のキリストがエマオの途上で、宿に来て、二人の前でパンを裂いた。そしたら、あの二人の旅人が目が覚めて、

「あっ、キリストだ」

とわかった瞬間に姿が消えたとあるでしょ。あれは夢でなくて現実。私はちょっとそれを思い出した、ここを読んだ時に。註解書には何もそんなことは書いてない。即ち、愛する者がその香りある愛として、実はこのシュラミの女の中に入ってしまった。それで姿が消えたといったような気持でもって、これを読んだら、面白いのではないかと思う。一つの世界、一如の世界ですから、本当の愛は。だから、一如の現実になったということだ。「おやおや」ではなくて、これは大したことになったというわけです、逆に言うと。あのキリストの場合、御霊の作用。

さきにその物いいし時はわが心さわぎたり 我かれをたずねたれどもわず 呼びたれどもなかりき

いくら尋ねてももう遭わないし、呼んだけれどもどこかへ行ってしまって、山彦が響いてくるだけのものだと。

7をまわりありくわれを見てうちて傷つけ 石垣をまもる者らはわがをはぎとれり 8エルサレムのよ 我なんじらにかたく請う もしわが愛する者にあわば 汝ら何とこれにつぐべきや 我愛によりてみわずらうと告げよ

なんてね。そこまでは、この霊夢を見たシュラミの女の言葉。それは始めの方に牧者の言葉を引用しているわけ。そういうように読んでしかるべきところでありましょう。

９節はエルサレムの女の子たち――宮廷に仕えている女――が言っている言葉。

9なんじの愛する者は別の人の愛する者に何のれるところありや ののいとわしき者よ なんじが愛する者は別の人の愛する者に何の勝れるところありて われらに固くうや

# ●牧者は白くかつ紅にして

10 わが愛する者は白くかつにして 万人の上に越ゆ

１０節は、結構珍しい言葉が書いてある。

「牧者は白くかつ紅にして」

という。紅白というのは反対かと思うと、「白くかつ紅にして」という。これは「白く」という言葉は正に白光を放っているようなことなんです。白く輝く。太陽の光は白いというのはこの字を使う。「白く輝いた」というのは、あのマタイ伝１７章の変貌の山、あれと同じです。だから、キリストの白さというのは旧約でいうとこれのことです。それから、「かつ紅にして」という。これは血が紅である。外は白く輝きながら、内なる血は紅である。だから、「赤き血によりて贖われる」という、「血の贖い」というのはそのことです。これは黙示録７章１４節に、

「14 我いう『わが主よ、なんじ知れり』かれ言う『かれらは大なるより出できたり、の血に己が衣を洗いて白くしたる者なり。」（黙示録7･14）

「羔羊の血」の赤き血によって贖われて白くなったという。紅の血は贖いの力を持っている。そして、贖われた者は白くなる。だから、内は紅で外は白いという構造です。「白くかつ紅にして」というのは、そういうような具合に読みますと、非常に面白いです。

「万人の上に越ゆ」

という。「越ゆ」というヘブライ語はもともと「旗」という字から来た動詞です。おもしろいんです。「旗をかかげる」ということです。万人の上に旗をかかげているような、即ち、万人の上に旗印となっているような人だということ。旗印なんだ。「御旗をかかげてどうのこうの」という讃美歌（　）があるね。それが万人の上に越ゆということ。ですから、この１０節は、これをキリストにえると、この牧者への言葉は非常に面白い。

「わが愛する者は白くかつにして 万人の上に越ゆ」

と。正に超人であります。ユーバーメンシュ〔Übermensch〕。キリストは超人。無者なるがゆえに超人である。

11 そのは純金のごとく

これも黙示録に出ているです、キリストの幻の中に。

その髮はふさやかにして黒きことのごとし

「漆黒」なんていうね、漆のようだと。

12 その目は谷川の水のほとりにおる鴿のごとく 乳にて洗われて美わしくれり〔乳の中に浴して目の穴にはまっている〕

眼窩のことです。なんか面白いことが書いてあるね。

13 そのはしき花の床のごとく 香草の壇のごとし〔その馨草の萌えいずる芳しき花壇のごとし〕

形容がちょっとオーバーすぎるような、考えられないような形容です。しかし、みんな具体的な自然界のものです。

その唇はのごとくにして沒薬の汁をしたたらす

これはみんな牧者の様相の形容です。

14 その手はきばみたるをしの〔腕輪〕のごとく 其は青玉をもておおいたるののごとし

「」はよく出てくる。非常に白くてかなり柔軟性がある。「碧玉」というのは非常に尊ばれる宝石だ。これも黙示録に出てくる。

15 そのはの柱を黄金の台にてたてたるがごとく

「蝋石」というのは大理石のこと。

そのはレバノンのごとく

非常に堂々たる姿です。レバノンの香柏だね。

そのれたるさまは香柏のごとし

レバノンの山に生えている香柏のごとしというわけだ。

16 その口〔声〕ははなはだ甘く

甘美であると。

誠に彼には一つだにうつくしからぬ所なし〔その全存在は美わしい〕

全存在でも全人格でもいい。霊肉渾然たることです。

エルサレムの女子等よ これぞわが愛する者 これぞわがなる

と言って、非常にその牧者のことを最大級の言葉で褒めているわけです。まぁこんな文学はちょっとないね、そこらに。

# ●我は彼に彼は我に

それから、第６章にいきまして、

1 のいとわしきものよ

これはシュラミの女に向かってエルサレムの女が言っているわけです。

汝の愛する者はへゆきしや なんじの愛する者はいずこへおもむきしや われら汝とともにたずねん

2わが愛するものは己の園にくだり しき花の床〔花壇〕にゆき 園の中にて群をい また百合花を採る

この表現は時々出てきますね。４章にも出てきました。

3我はわが愛する者につき わが愛する者はわれにつく 彼は百合花の中にてその群を牧う〔わが愛する者はわれのものなり、彼は百合の中にてその群を牧う〕

これも２章に出てきた。この「もの」という言い方は、ヘブライ語では非常に簡単な言い方です。「私はわが愛するものに」という、「I to him, he to me. 」という言い方です。

「我は彼に、わが愛する者に。わが愛する者は我に」

と、それだけの表現です。そういう互いに離れることのない間柄でありますというわけだ。我々のキリストとの関係が正にこれであります。

「我は彼に、彼は我に〔く〕」

という。「く」という日本語の表現はなかなかいいです。

それから今度は、ソロモンといわれる王様が、

4わがよ なんじは美わしきことテルザのごとく

といって、自分はそのシュラミの女に対して「わが愛する者よ」なんて言って呼びかけているわけです。「テルザ」というのは、イスラエル王国が分裂して北朝イスラエルのヤラベアムという王様が建てた都の名前です。ヨラム王朝の時にサマリヤに移りました。そのサマリヤに移る前がこの「テルザ」です。

やかなることエルサレムのごとく 畏るべきこと旗をあげたるのごとし

女性を形容するのに、「畏るべきこと旗をあげたるのごとし」なんていうのはだいぶ、どういう表現かと思う。

5なんじの目は我をおそれしむ 請う我よりはなれしめよ

〔なんじの瞳を我より離れしめよ、汝の瞳は我をして恐れしむ〕

威厳があるんだね。

なんじの髮はギレアデ山の腰にしたる山羊の群に似たり

〔なんじ髪はギレアデの山より馳せ下れる山羊の群にさも似たり〕

6なんじの歯は毛をりたる牝羊のよりたるがごとし おのおのをうみてひとつも子なきものはなし

〔なんじの歯は洗い場よりあがる定期的に毛を切られる羊のまきのごとし。彼らはみなつがいにして……〕

7なんじの頬はの後にありて のに似たり

こういう「石榴」なんていう言い方は４章にも出てきた。赤いからでしょうね。そうすると今度は、

8六十人 八十人

昔の東洋の王様なんてそんなもんだ。それから、「」というのは宮廷の女のことです。

数しられぬあり

給女です。そして誇りやかに、そんなことを言っているんだ。

9わが鴿わがき者はただ一人のみ 彼はその母のにして産みたる者の喜ぶところの者なり〔選びの子なり〕女子等は彼を見てなる者ととなえ〔祝し〕后等は彼を見てむ

といって、素晴らしい美女であるというわけだな。そうするとエルサレムの女たちが、

10 こののごとくに見えわたり〔しののめのごとくに見下ろし〕月のごとくに美わしく日〔太陽〕のごとくに輝やき畏るべきこと旗をあげたるのごとき者は誰ぞや

さっきの言葉をここに持ってきて、とにかく表現としては凄い表現です。「それは一体誰の話だ」と、皆がそう聞いていると。そうすると今度は、シュラミの女の言葉になります。

11 われの園にくだりゆき 谷の青き草木を見 葡萄や芽ざしし の花や咲きしと見回しおりしに 12 わず知らず 我が心われをしてわが貴とき民の車のにあらしむ

そうすると、エルサレムの女たちが、「もう帰れ、帰れ」と言う。これは原文では第７章になっている。

13 帰れ帰れ シユラミのよ 帰れ帰れ われら汝を観んことをねがう

「こっちに帰って来い」というんだな。

なんじら何とてマハナイムのを観るごとくにシユラミの婦を観んとねがうや

「マハナイムの」というのは、二つの陣営に両方がなって、輪舞する躍りのことです。創世記３２章に出ている。天使の舞い躍りもやっぱりそうやって群をなして二つになって踊る。そういった躍りを見たいと。

# ●鹿の双子なる二の小鹿のごとし

７章にいきますと、またソロモンが言い出す。「気高き女よ」と言って、その足は何とかだ、そのは何とかだ、そのは何とかだとかいう。

1 君のよ なんじの足はの中にありてに美わしきかな 汝のはまろらかにして玉のごとく の手にて作りたるがごとし 2なんじのはの欠くることあらざるきのごとく なんじの腹は積みかさねたる麦のまわりを百合花もてかこめるが如し

これはなかなか力強い、痩せていない、かなり太っている形容詞です。ということは、多産であるということを意味しているらしい。

3なんじの乳房は牝鹿の双子なる二の小鹿のごとし 4なんじのはのの如く 汝の目はヘシボンにてバテラビムの門のほとりにある池のごとく

「ヘシボン」というのはやはり死海の東方にある町の名前です。モアブの都会だったかな。アモリ人の王がヘシボンにやっつけられたということがヨシュア記に書いてあった。だから、ヘシボンはモアブの誇りであるというわけです。そこには美わしい貯水池があったらしい。「バテラビム」というのは「バートラビーム」といって、「多くの娘」という意味です。娘がたくさん歩いていたのでしょうね。ちょうど銀座の何々娘とか前にあったね、あれ式なんだ。繁華な都大路のことをいうわけです。そういった門、その大路の門のほとりにある池のようだと、その瞳が。「大地の目」というんです、池や湖のことを。ヘブライ語ではそういう言い方をする。

なんじの鼻はダマスコにえるレバノンののごとし 5なんじの頭はカルメルのごとく なんじの頭のはのごとし

非常に黒く美わしい紫の艶を持っている。

王その垂れたる髮につながれたり

6ああ愛よ もろもろのの中にありてなんじは如何に美わしく 如何にばしき者なるかな 7なんじの身のはの樹に等しく なんじの乳房は葡萄のふさのごとし

非常に乳が豊かだということを言おうとしているらしい。

8われう この棕櫚の樹にのぼりその枝に執りつかんと

しがみつくというんだな、大変な表現です。

なんじの乳房は葡萄のふさのごとく なんじの鼻のはのごとくわん

まず大変な形容で、王様がシュラミの女性を形容したのがそこまでです。

それから今度は、シュラミの女が、

9なんじの口はのごとし わが愛する者のためにかに流れくだり れる者の口をして動かしむ

言葉が流れることや、あるいは乳が流れることとを、両方にかけたらしいね。

10 われはわが愛する者につき 彼はわれを恋したう〔彼を恋いしたうはわが義務なり、わが務めなり〕

ちょっとこれは面白い言葉です。

「ソロモンの王様が私のことを褒めてそんなことを言ってもダメだ。私はこの牧者の方の者であって、そちらを恋い慕うことが自分の義務である、使命である」

と。「義務」という訳し方もあるけれども、「使命」といってもいいね。そうするとシュラミの女が、

11 わが愛する者よ われら田舍にくだり 村里に宿らん

田舎に行こうではないか、そんな王宮はごめんだというわけだ、自分は田舎娘だから。

12 われらにおきて 葡萄や芽ざしし やいでし の花やさきし

と、そう言おうではないかと。

いざ葡萄園にゆきて見ん かしこにて我わが愛をなんじにあたえん

現実にその田園に行って、本当にその愛の生活をしたいというわけだ。

13 かぐわしきをち もろもろのき古き新らしき共にわが戸の上にあり わが愛する者よ 我これをなんじのためにたくわえたり

それで、この５章、６章、７章は大体お終いです。

# ●寝て夢み覚めておもう

ところで、この「夢」ですが。あなた方は夢を見るですか、見ないですか。私は寝る前に祈って、ある事を特にある場合には祈って寝ると、明け方に近くなって、その祈りに答えられるような夢を時おり見る。だから、祈ること、そして、希望なり平安なり、とにかく一切を神さまに、キリストに任せてねむるということは非常に大事なことです。あるいは、全然思ってもみないことをハッキリと示されることもある。非常に問題としていることを解かれることもある。

夢は、「ヘレム」といいます、ヘブライ語では。あるいは「ハッローム」という言い方もあります。夢で一番我々が思い出すのは創世記２８章です。…… 創世記２８章１０節から１７節は非常に大事なところのひとつですね。

「10 にヤコブ、ベエルシバよりたちてハランの方におもむきけるが 11にいたれる時 日暮れたれば 即ちに宿り 其処の石をとり 枕となして

石枕だ、旅寝の石枕。

其処にしてたり 12時に彼夢みて の地にたちいて 其の天にれるを見 又神のの其にのぼりくだりするを見たり

これは素晴らしいですね、夢を通して、神さまがハッキリと、神の使いが現れている。

13エホバ其上に立ちて言いたまわく 我は汝のアブラハムの神 イサクの神 エホバなり

お前ヤコブの神だというわけだ。

汝がところの地は我之を汝と汝の子孫に与えん 14汝の子孫は地ののごとくなりて 西東北南にるべし 又天下の諸の 汝と汝の子孫によりてをえん 15また我汝とともにありて 凡て汝が往くところにて汝をまもり 汝を此地にき返るべし 我はわが汝にかたりし事を行うまで汝をはなれざるなり

そこで目覚めて、

16 ヤコブ目をさまして言いけるは 誠にエホバ此処にいますに我しらざりきと 17ちていいけるは 畏るべき哉 此処是即ち神ののならず 是天の門なり」（創世記28･10～17）

家も何もない。けれども、ここが本当に神さまのいらっしゃる所が神の家であると。またそこがいつでも開けているところの天の門である。

「わが為に門は開けたり」

というが。夢の現実はある意味において相対的な現実ですが、もっと凄い現実であるんです、祈りによって示されたような夢というのは。とにかく、どのみち、寝ても覚めても、

「さめておもい、いねて夢み、わすれぬはみくに」

という讃美歌（486）があるね。相対的現実でみている。私たちはこの花を肉眼で見ている。肉眼で見ている現実も、それも本当でしょう。けれども、もうひとつ霊眼で見ている現実がある。それは花のこころを見ている世界。花のこころを見ている世界は、これが霊眼で見ている。そして、そこで示される。

# ●霊夢・霊現

エレミヤ記の１章１１節に、

「11エホバの言また我に臨みていう エレミヤよ 汝何をみるや 我こたえけるは の枝をみる 12 エホバ我にいいたまひけるは 汝善く見たり そはわれかに我言をなさんとすればなり 13 エホバの言ふたたび我に臨みていう 汝何をみるや 我こたえけるは たるをみる そのは北よりに向かう」（エレミヤ1･11～13）

即ち、鍋だとか巴旦杏を見て、それは相対的現実のものを見ている。しかし、それにおいて示されている、これはひとつの徴なんです。

「過ぎゆくものはなべて映像（象徴）にすぎず」（『ファウスト』12104～12106行）

“Alles Vergängliche ist nur ein Gleichnis”

という。徴候である。神の現実の徴としての相対的現実。それを霊視するわけです。それは夢の中で、霊夢において。夢の中でそのような現実にでっくわすから、それを「霊夢」というので、夢に霊夢というのがあるわけではない。夢の中でそういった絶対的な現実が或る現象を通して示される。だから、覚めていても、目をつぶっていても、見るものは、どちらにしても、心眼をもって、霊眼をもって見なければ、見えないわけだ。預言者エレミヤの場合は、相対的現実の現象を通して、その奥の世界を見ているわけです。

今度は、相対的な夢の現実を通して、そこでものを見させられ、あるいは聞かされている。これが霊夢という。片一方は霊夢に対して「霊現」といったっていいよ、霊のの世界。要するに、祈り心が大事なわけです。祈り心の土台となるものは御言であります。御言と御霊とは分けることができないです、聖霊と聖言とは。

だから、聖書はよく読んでいないといかん。「聖書をよく読む」といったって、それはもちろん御霊をもって読むことであって、文字に囚われた読み方ではない。そうする時に、ハッとしたことが、パッと示される。これは普通の毎日の生活でもそうですよ。あることがパッとくる。そいつを妙に自分の意志でもって押し切ると間違いをおかす。そのことで、何でもすぐしょっちゅう意識的に妙にそう思ったら、また病的になる。そしてかえっておかしなことになる。まぁ何ともしょうがないね、これはだんだん体験していくよりか。

そういう意味で、ヤコブの夢がある。それから、マリヤの夫にかかってきた、あのキリストの誕生のところのあの夢。これは非常に大事な夢です。夢で示されて、エジプトに逃げて行ったでしょ。あれもそうです。みんな天使が出てくるんだから、ガブリエルが。

しかしながら、夢というのはいろんな種類がありますからね、いわゆる心理作用であまり心配していると、その現実があらわれてきて、「ああそうだ」なんて思うと、とんでもない間違いをおかす。……

また、少年ヨセフが夢で判断したりね、ああいうこともあるわけです。創世記２０章にもある、

「1アブラハムよりりて南の地に至り カデシとシユルの間に居り ゲラルにり 2 アブラハム其妻サラを我妹なりと言いしかば ゲラルの王アビメレク人をしてサラを召し入れたり 3 然るに神 夜の夢にアビメレクに臨みて 之に言いたまいけるは 汝は其召し入れたるのために死ぬるなるべし 彼は夫ある者なればなり」（創世記20･1～3）

と。こういうように夢でもって示される。これはアブラハムの方が悪いんだ、妹だなんて言ったから。

要するに、夢を別に問題にするわけではありませんけれども、祈りの世界ではそういう示しもありますが。あまり「お示し、お示し」なんて言って、こだわることは決して感心しません。そういうことはむしろ控えた方がいい。聖書の言葉に即して、そして深く自分で祈る時には、いわゆるお示しならざるところの確信がくる。そういうような意味において、祈りの世界です。また、時には本当に霊夢によって示されることもありますから、その時はもういっぺん祈って、しっかりそれであることを受けとったならば、それを正しく受けとるということが大事でしょう。

では、今日はそこまでにしておきます。

# ●祈り

雅歌書５章、６章、７章を通し、そこに新郎なるあなたの姿の隠されているところを見、また新婦であるところのエクレシアの贖われたる美わしさを見ることができ、感謝であります。私たちの世界では、本当の美とは、隠されたる美であります。どうぞ、そのようにして、内に隠されたる美が、この美わしき魂が、外に自然に顕れていくことができますように、願い奉ります。

真の表現は、巧まざるところの、あるがままの表現であることを思いますが、どうぞ、私たち自身がそのような芸術的、あなたの生ける芸術作品となることができますように、願い奉ります。

この兄弟姉妹たちがみなそのような天下一品の生けるあなたの作品でありますがゆえに、どうぞ、そのようにしていよいよこの兄弟姉妹たちに、あなたのご栄光が現れますように、願い奉ります。いろいろ人間の現実には、躓いたり転んだり、さまざまなことがありますが、しかし、どんなことがあっても、

「んかた尽くれどもを失わず」

とパウロが言ったように、窮すれば窮するほど逆に驚くべき世界が展開することを約束されております。どうぞ、そのようにして我々は天的現実が本当の勝利であることを、また本当の現実であることを、いよいよ体験しつつ進ましめ給わんことを願い奉ります。

我々の側の何ものでもありません。ただあなただけです。感謝いたします。

今、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれと共に、御名により捧げ奉る。アーメン。

「１９７６年　新年集会　祈祷会」

ルカ伝第９章５１節～６２節

武蔵野新年日曜集会 祈祷会　１９７６年１月１１日

小池辰雄

# 【見出し２】

【ルカ９】

51イエス天に挙げらるる時満ちんとしたれば、御顏を堅くエルサレムに向けて進まんとし、 52 己に先だちてをしたもう。彼ら往きてイエスの為にをなさんとて、サマリヤ人の或村に入りしに、 53 村人そのエルサレムに向いて往き給うさまなるが故に、イエスを受けず、 54 弟子のヤコブ、ヨハネ、これを見て言う『主よ、我らが天より火を呼び下して彼らを滅すことを欲し給うか』 55 イエス顧みて彼らを戒め、 56 遂に相共に他の村に往きたもう。

57を往くとき、或人イエスに言う『何処に往き給うとも我は従わん』 58 イエス言いたもう『狐は穴あり、空の鳥はあり、されど人の子は枕する所なし』 59 また或人に言いたもう『我に従え』かれ言う『まず往きて我が父を葬ることを許し給え』 60 イエス言いたもう『死にたる者に、その死にたる者を葬らせ、汝は往きて神の国を言いめよ』 61 また或人いう『主よ、我なんじに従わん、されど先ず家の者に別を告ぐることを許し給え』 62 イエス言いたもう『手をにつけてのち後を顧みる者は、神の国にう者にあらず』

# ●福音は死ぬか生きるかの問題

ルカ伝９章５１節からが、キリストがガリラヤからエルサレムへ向かう道行きの最初のところです。エルサレムに向かってキリストが十字架の突破の道に進む。

51イエス天に挙げらるる時満ちんとしたれば、

ということがそのことです。やがて十字架を通って、贖罪の死を遂げて、天に往かれるその時を既に予見しておられる。

御顏を堅くエルサレムに向けて進まんとし、 52 己に先だちて使を遣したもう。彼ら往きてイエスの為にをなさんとて、サマリヤ人の或村に入りしに、 53 村人そのエルサレムに向いて往き給うさまなるが故に、イエスを受けず、

「サマリヤ人」というのはユダヤ人と仲が悪いものだから、それでちょっと敬遠されてしまった。

54 弟子のヤコブ、ヨハネ、これを見て言う

けしからんというわけで、

『主よ、我らが天より火を呼び下して彼らを滅すことを欲し給うか』 55 イエス顧みて彼らを戒め、 56 遂に相共に他の村に往きたもう。

57を往くとき、或人イエスに言う『に往き給うとも我は従わん』

ここに、甲、乙、丙と三人の人がでっくわしていますね。大いにその意気込みはいいけれども、

58 イエス言いたもう『狐は穴あり、空の鳥はあり、されど人の子は枕する所なし』

「それだけの覚悟があるか」

というわけです。ところが、こう言われたので、その「従わん」と言ったのが、どうも退いたらしいね。人間的な決意ではどうにもならんです。

「人の子は枕する所なし」

と、キリストも、何といいますかね、神の国で安らうまでは。しかし、キリストは――申し上げているとおり――至る所を枕とした。このことは『無者キリスト』の中にも書いてあります。いわゆる「枕するところのない」ような、石枕でも草枕でも、木の根っこの枕でも。

「棄身でなければダメだよ」

ということですね。

59 また或人に言いたもう『我に従え』

「ついて来なさい」と。

かれ言う『まず往きて我が父を葬ることを許し給え』

これは常識的にも「父を葬ることを許し給え」というのは、

「じゃ、いいよ。行って葬って来なさい」

と。まぁ日曜日の集会に来る来ないということも、いろんな事情でもってつい来ないということもありますが、ある時はその事情を乗り越えるということをしないとね、本当にキリストの弟子にはなれないです。この世的なことでね。

私はそういうことを言ってきた時に別に、

「それでも、来い」

とは言いません。言いませんけれども、それは自分で判断していく。

「自分にとっては、福音は死ぬか生きるかの問題だ」

というだけの気合があれば、そういう時にその相手の人に向かって、

「私はどうしても日曜はダメなんだ。悪いけれども」

と言って来るのが、本当の在り方です。それもできない場合もあります、現実問題は。そういうことを私はいちいち言いませんけれども。

# ●非常識・超常識

60 イエス言いたもう『死にたる者に、その死にたる者を葬らせ、汝は往きて神の国を言いめよ』

これは申し上げている通り、「死にたる者に」は誤訳で、

「死者は葬儀屋に任せよ」

ということです。アラミ語で「ミッター」「マッター」という言葉があって、「マッター」（葬儀屋）に「ミッター」（死者）を任せよということ。

「死者は葬儀屋に任せて、弔いをする人に任せて、お前は直ちに行って神の国を伝えろ」

と。だから、この

「或人に言いたもう」

というのは、よほどこれは選ばれた人です。普通の人なら、キリストはこういうことは仰らない。けれども、「お前は」と思う人に向かってはこういうことを仰る。即ち、神の国を宣べ伝えることのできるような人ですから。

61 また或人いう『主よ、我なんじに従わん、されど先ず家の者にを告ぐることを許し給え』

従って行くけれども、

「だけれども、まぁちょっと今、別れを告げさせて下さい」

と。これも常識的にいえば、「じゃ、別れを告げてこい」と言うところですけれども、

62 イエス言いたもう『手をにつけてのち後を顧みる者は、神の国にう者にあらず』

まぁキリストの言葉は烈しいです。我々の言葉なんか烈しいようにみえても、こんなものではないですから。もし私がこういうことを言ったら、

「小池先生は非常識だ」

と、こういうわけですよね。ところが、キリストの言葉には、非常識、超常識がいくらでもある。そこらのこの気合をつかまえないとね。

「言葉」というものは、その気合を、その言葉が「何を意味しているか」ではなくて、

「どういうねらいを持った言葉であるか」

ということを受けとらないと、みんな言葉に躓くです。そしてまた、本当の言葉の真意をつかまえることができません。

「右のを打たば、左の頬を向けよ」

とキリストは言われた。

「一里をいなば、二里を行け」

と、そう言うキリストはみな、

「すべては棄身だぞ」

ということです。この棄身の愛、棄身の担い、もう何といいますかね、そういう気合を受けとらなかったら福音書にも躓くし、気合を受けとったら却って力になるしと、そういうわけです。まぁ、すべてに調和があるようにしていこうとしたって、これは無理なんで、この福音の世界では、

「弱き者には弱きものとなる」

とパウロが言ったが、その弱き者を躓かせることはいけませんけれども、本当にお互いに弾力性のある、

「信じぬき、耐えぬき、望みぬき」

という、そういう魂でいかないというと、人間関係というものは本当の力強いものにはならないです。そのようにして、我々は行きたいと思います。

# ●祈り

それじゃ、時間もありませんから、短く祈ります。

一切を知り給う主さま。ここに今、遺れる民──栗崎さん、荆尾君、服部さん、松井君、針谷君、林君、澤田君──今、このようにして祈祷会を持たされましたが、どうぞ、いろいろな事情で先に帰った兄弟姉妹たちをあなたが深く顧みて下さるように願い奉ります。

我々はここに遺され、新年集会の最後の祈祷会を短いながら持たされたことを感謝いたします。どうぞ、この一年間、この一人びとりが本当にいよいよあなたに知られ、あなたを知り、あなたに愛され、また愛し、そして本当にその愛が、その力が、その生命が、その光がこの兄弟姉妹たちを通して、どうぞ、いよいよこの幕屋に浸透し、この幕屋自身が本当に互いに相忍び、相許し、相望み、相信じ、いよいよ進んで行くことができますように、切に願い奉ります。御霊におけるところの祈りは必ず聴かれ、また勝利することを信じて進んで参ります。何も憂いません。あなたはこの聖霊を賜って、そこに砕けつつ平伏しつついくところに、なんら問題もないことを信じて感謝いたします。どうぞ、いろいろな人間ですから、躓いたり転んだり、いろんなことがありましょうけれども、しかし、それらの一切の経験を通して、

「信ずる者には善となる」

とある通り、この兄弟姉妹たちが一切を本当の主につける、あなたにつけるプラスにして進んで行くことができますように、魂をいよいよ鍛え、また祝福し給わんことを切に願い奉ります。

今、兄弟姉妹たちのそれと共に御名により捧げ奉る。アーメン。